

ザ・ミューディアム：メディア論の試み(6)番外の章

NAKANO, Osamu / ナカノ, オサム / 中野, 収

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

47

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

2001-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015172>

味では、「テレビジャーナリズム」は終わった、ともいえる。しかし、ぼくは、50年間、何度かブラウン管上に映しだされた「リアルな現実像」の鮮烈を忘れることができない。新しいテクノロジーは、さらにぼくらを「よりリアルな現実」の前に立たせてくれるはずである。それがジャーナリズムとしての働きであるかどうかはともかく、このテレビの未来は信じていていいのではあるまいか。

後記 冒頭にも書いたように、これは論文ではなく、三つのエッセイの集まりである。ごく個人的な思い出、思索、思惟、思考が主体なのだから。この50年のテレビ像の変遷を描くについては、いろいろなスタイル・方法があり、しかも個人のスタイル・方法の間に優劣があるとは、ぼくは考えない。だから、このエッセイで採用したスタイル・方法で、その実像の核心に案外せまれるのでは、と思っている。

もちろん、ここに描かれたのは、ぼくの眼に映った「実像」である。これと異なる「実像」の存在することは認める。問題は、描写された像に接して、読者がどの程度リアリティを感じるか、という点にあるのでは。この点に関していくらかは自信はあるのだが。

ぼくがこんなテレビ像を持つに至ったについては、もちろん、ぼく自身のテレビ接触・テレビ視聴・テレビ体験がある。同時に、本文でもいくつかは指摘しているわけだけれど、この間に接した「テレビ論」の数々に負うところも大である。いうまでもなく、共感三分の一、反撥三分の二ぐらいで読んでいたような気がする。参考（参照）文献としてそれらの一覧表をかかげることも考えたけれど、なんかこのエッセイ集には大袈裟すぎると思い、割愛することにした。『メディア論』（『ザ・ミーディアム』）をまとめる際には、明示することになるだろう。

ナリズムだ、とっていつこうに差支えない、とぼくは思う。他方、ジャーナリズムのアイデンティティは、権力や体制への批判にあるということに固執すれば、たとえばテレビにおいてジャーナリズムは可能なのか、という問題が生ずる。なにしろテレビの支配的な機能は広義の娯楽と社会景観提示と広告なのだから。

湾岸戦争とその報道は、メディアの働きのまったく新しい局面を示していた。しかし、報道についての言述は実際は、先にも指摘したように、この数十年支配的だった陳腐なマスコミ批判だけが目立ち、その新しさに注目する議論はなかった。「グリコ・森永」同様、湾岸戦争など現代を象徴することからではないし、メディア・ジャーナリズムにとっても一番の重要事項などではない、ということなのだろうか。しかし、ぼくはこの立場をとらない。

とはいうものの、ムリもないという感じも否定できない。旧ユーゴ内の民族紛争とNATO軍の介入という「戦争」は、湾岸戦争と比べると、ケタの違う人的被害、文明・文化の破壊、人々の心の荒廃、いまだに人々の生命と財産を脅かす戦争の残りもの等々をもたらした。「破壊」の総量は、これが本物の戦争であったことを物語っている。さすがのボードリアルも、「この戦争はなかった」というまい。この戦争におけるメディア・ジャーナリズムの働きは、第二次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフリカでの民族紛争、アフガン戦争の延長線上にあった。したがって、この戦争報道に対する批判はほとんどない。伝統的なジャーナリズムはいまだ健在ということか。つまり、湾岸だけが例外であった……。湾岸報道の様態は、従来のジャーナリズムイメージからの距りは大きかった。これでは批判せざるをえない！ やはりムリもないということか。しかし、メディアの働きの形と、戦争の惨禍の度合に相関関係があるとすれば、ぼくには湾岸報道を否定的に評価することなどできない。

20世紀後半の権力構造の変換、価値の相対化・多元化、ライフスタイルの変貌、メディアの極度の日常化、新メディアの参入の常態化、そしてスクリーンリズム・観客化の結果、ジャーナリズムも変化せざるをえない。湾岸報道は、その変化の尖端を一時的にみせてくれたのではなからうか。変容しながらもジャーナリズムはなくならない。ただ、ある状況下で、どのメディアがジャーナリズムをになうか、という問題があるだけなのだ、とぼくは考えている。テレビは、この50年間、確実にジャーナリズムとして働いていたといっている。しかし、それは論者が理念的に仮定していたジャーナリズム像とは違っていた。のみならず、ますます離れつつある。その意

内容をなぞりながら経過していった。ポードリアルのいかたを借りれば、「現実」がメディアの提示内容を模擬したのである。ゲームはこういう形で「現実」とかかわった。したがってもはや単なるゲームではなかった。現実が模擬せざるをえないシミュレーションはいかにして可能であったのか。ごく常識的に考えてメディアは相当に有効なデータをもっていた。そのデータはどうやって入手したか。

右に「いい意味で予想を超えた」と書いた。多国籍軍側のメディアの報じたシミュレーションは、イラク軍側も知るところであったはずだ。もちろん、メディアが取得したデータぐらいイラク側ももっていた。同じシミュレーションが可能だったということだ。このシミュレーションを知った上でイラク軍の行動は、予想以上に迅速で、多国籍軍とイラク軍との地上での接触はほとんどなかった。接触したら不可避であった両軍の人的被害は、ほとんど皆無であった。この一連の事態の中で、ゲームのような報道だがその果たした役割は、それがジャーナリズムに属するか否かとは別に、大変に大きかった。前項で、事件の時点と報道の時点の時間的逆転のことを指摘した。あれらは、あくまでも結果としての逆転、意図的でない逆転だった。しかし、このシミュレーションという形の先取りは意図的であり、いかなる報道形態が可能かという思考の結果であって、気がついたらそうだった、というものでは決してない。これまでも「予想記事」というのがあって、これは本来のジャーナリズムの働きからは逸脱気味である、と否定的に評価されていた。現に、選挙時のメディアの当落予想調査結果の公表については、メディアの内部でも疑問視されている。湾岸報道は、テレビゲームのようであるのみならず、まさに「予想記事」であった。その「予想記事」が、必ずしも否定しえないある役割を果していた。

その役割は、ジャーナリズムという概念に含まれるものなのかどうか。テレビジャーナリズムが、あるいは現代の状況の下でメディアのジャーナリズムが可能かどうかは、模擬される「先取り」をジャーナリズムと認めるかどうか、つまりはジャーナリズムの再定義にかかっている。人々が多様な価値観を自由に選び、相互に異なる利害関心・利害関係をもち、そして集団を成して「生」を営んでいる、それ故に「社会的力」が不均等に配分されているという文明状況の下では、「力」の適正な配分や利害の調整のための機能としてのジャーナリズムは欠かせない。もちろん、文明状況は歴史的に変貌するから、ジャーナリズムのありようや作用の仕方も歴史的に変わる。したがって、その定義は常に書き換えねばならない——と考えれば、「現実」が模擬するシミュレーションとその伝達がジャー

湾岸報道批判の論点は、①戦争を報ずるテレビ映像（新聞記事ものだが）がテレビゲームのに酷似していた。②メディアの取材は、多国籍軍（アメリカ軍）によって完全にコントロールされていて、取材の自由はなかった。そして、そのコントロールを超える努力をメディアはほとんどしていない。③メディアの立場は、多国籍軍側にあつて、イラクを敵視していた。④戦争の原因・背景についての解説・説明が著しく不足していた。⑤したがって、メディアはジャーナリズムとしての役割をほとんど果していなかった——とまとめることができる。これら批判点についての反批判は大変容易であるが、わずらわしいので省略する。ここでは①についてのぼくの見方を紹介しよう。ジャーナリズムの存否は、この論点に集約されるはずだから。

ボードリアルに「湾岸戦争はなかった！」という怪著がある。いうまでもなく、フランス的な皮肉なエスプリが書かせた著作であるが、いわんとするところは、戦争の様態がすっかり変わってしまった、ということとぼくは解する。実際、湾岸戦争の現場は、どこに、どう、どう、どうに存在していたのか。ボードリアルの「なかった」は、現場のありようの核心を衝いている。それは、ぼくらの既往の常識による「ある」とは、相当に距っていたのではあるまいか。その現場に、メディアの取材はいかにしてアプローチしうるのか。「ある」が常識を超えている以上、いわゆる「取材」はもう不可能だったのだ。その結果が、「バグダット空爆」のあの花火大会のような景観描写であり、画面や紙上で繰り返された戦局展開を予想するシミュレーションであった。だから画面（紙上も）はたしかにテレビゲームのようであった。戦争という苛烈・凄惨であるべきことがらが、日頃おなじみのテレビゲームと相同・等価にしかみえない——のはたしかに問題なのかもしれない。しかし、これは、メディアがそのジャーナリズムとしての役割を怠ったからなのだろうか。ぼくにはそうは思えない。やはり、ほとんど袋小路に入った感じの「近代」の状況の所産であり、ジャーナリズム機能もその所産に属して、決して事態の原因ではないのだ。

かくして、あのゲームのような画面とシミュレーションを内容とする情報群が、ゲームと決定的に異なるのは次の点にあった。内外のメディアは、入手したデータをもとにしてそれぞれのシミュレーションを試みた。がその中身は、メディアによって著しく異なるというものではなく、むしろほとんど等しい予想をしていたといっている。そして、なによりも決定的なのは、その予想をいい意味で超えて戦局が展開したことである。つまり、シミュレーションを実行した時点からすれば、未来に属する現実は、そのシミュレーション

る、というものだ。論文が提示した命題群は、事件は道徳性を稀釈されて社会景観化すること、事件の報道（ジャーナリズムの方法）を主たる役割とするメディアの行動も事件に包摂されてしまうこと、視聴者はその景観の観客になっていること、ジャーナリズムの有力な方法であるスキャンダリズムがジャーナリズム機能そのものを阻害してしまうこと、これらは、「頂点に上りつめつつある近代化」という文脈で起こっている・必然的に起こってしまう——と書き分けることができる。このメディアの働きは、「オイルショック」の時のその延長線上に位置づけられる、とぼくは考えている。たとえばの話だけれど、「事実」と「報道」の時間的前後関係は、さらに曖昧模糊としてくるのだから。もうひとつ、情報化は、当然のことながら、人々の所有する情報・知識量を急増させる。政界や経済界の、あるいは芸能の世界やメディア業界の、とりわけ内幕情報が行きわたってしまう。だから70年代、メディアの提供する情報を自分で選び、自分で解読し、自分なりに楽しむ視聴者、いわゆるアクティブ・オーディエンスが出現して不思議ではない。価値の多元化という居心地のいい社会的状況の下で、このオーディエンスは、事件の観客となり、報道に含まれるスキャンダリズムを楽しむ、悪く言えばすれっからしの視聴者に「進化」した。そしてさらにはまた……。こういう事態において、ジャーナリズムは、なによりもまずテレビジャーナリズムは本当に可能なのだろうか。

湾岸戦争は、いや湾岸戦争報道と報道批判は、情報化・メディア化時代のジャーナリズムの可能性とスタイルへのあらためての考察を要請していた、と思う。が実際は、報道批判が圧倒的に多数であった。'50年代以来のマスコミ・新聞批判のスタイルがずっと続いているというのは、まこと驚くべきことであって、これ自体考察に値するのだが。したがって、批判に対する反批判はほとんど見当らなかった。「マスコミは、権力に屈して、ジャーナリズムとしての責任を果さなかった」という主旨の意見のみが語られた。しかし、ぼくには、一マスコミ機関の意思やジャーナリストの良心などで「責任が果せた／果せない」という問題が解決するとは思えなかった。そこで、湾岸戦争時、マスコミメディアは、どういう条件に置かれ、そこでなにが可能だったのか、を主観的にはごく即物的に描いたエッセイをふたつ書いた（『報道』の娯楽化』『経済往来』'91年8月。「湾岸戦争とマスコミ」『大田区民大学のあゆみ』'92年4月）。掲載誌がごくマイナーであったため、論者に注目されることなどもちろんなかった。以下、ふたつのエッセイの主旨を紹介する（両エッセイは、拙著「都市の『私物語』」有信堂93年8月に所収。くわしくはそちらで）。

ンスII読者の共感も同情もえられなかった。したがって、この事件に関するメディアのジャーナリズム機能は、オーディエンスによっても挫折させられていた。事件の犯罪性に批判的なオーディエンスも少数いただろうけれど、大半は警察（権力）とメディアが踊らされている「事件」全体を楽しんでいた。彼らは事件全体の観客であったのだ。

あの事件の報道に関して、メディアがなんらかジャーナリズムの働きをしていたことを否定しない。しかし、オーディエンスは、事件のみならず、その報道内容をも楽しんでいた。メディア側の主観的なジャーナリズムと、オーディエンス側の観客化及び娯楽性のレベルでのジャーナリズムの享受とが、見事なコントラストを成していた。

ジャーナリズムが権力に対する広義の闘争を概念的に含むものだとすると、スクランダリズムはその有力な「武器」である。実際、19世紀以来、ジャーナリズムは方法としてのスクランダリズムをしばしば採用してきた。スクランダリズムが効を奏するのは、通常の倫理・規範を相対化あるいは逆転させることによって、敵対者を社会的に貶価させてしまうからである。ところが、ジャーナリズムはその闘争のために、みずから社会的権威となり、第四の権力にならざるをえなかった。そして皮肉なことに方法としてのスクランダリズムは、特に20世紀になって、いわゆる大衆がオーディエンスに大量に組み込まれるようになって、メディア自身にも向けられた。メディアの社会的権威は着実に低下し、権威たらしめていた「知的共同体」は大衆の前で解体を続けた。端的にいうと、日本の場合、'50年代まであった「知的エリート」を模倣しながら大衆も新聞を読む」という命題は、'60年代、テレビのチャンネル権が女性・子どもに移ることによって成立しえなくなった、ということである。こうして、現実に存在する犯罪・背徳・不倫・逸脱も、メディアに露出することによって、ドラマ・フィクション・ワイドショーの中のそれらと同列・等価になり、法・道徳・倫理とはまったく別の次元で楽しまれ、社会的景観化してしまう。こういうオーディエンスを相手にして、果してジャーナリズムは可能か。

'86年の小論では他の論点にもふれているけれど、以上が主旨である。「ジャーナリズムの衰退」といった所以である。が、本文中では「ジャーナリズムの終焉」というニュアンスのことばも使っている。選挙の前ともなると、結構「政治番組」を視聴し、番組の中で「今度の選挙で投票所へ行くか」と訊かれれば「イエス」と答える。しかし、投票所はいかない。が「開票速報」をまた熱心に視聴するオーディエンス。このオーディエンスと、あの「事件」の観客IIオーディエンスとは「同一人物」である。「終焉」といいたくもな

を認めるけれど、ぼく自身はこの見方に与しない。のみならず'80年代・'90年代そして近未来の文明とメディア状況を一望すればおのずから明らかのように、この見方は時代錯誤的である。ぼくらは、'90年代にもなると、もっと奇怪・不可解な事件を目撃することになるし、事件の渦中でメディアが主観的意図とは無関係な「役割」を「強制」されるといふ事実に出会うからである。ぼくにしてみると、少なくとも、あの事件の中のメディアの結果としての、位置・役割は衝撃的だった。その衝撃を契機にぼくは、「ジャーナリズムの衰退——観客化とスキャンダリズム」(『新聞学評論』35、一九八六)という小論を書いた。'80年代のメディア状況の中でジャーナリズムは可能か、ジャーナリズムの形成はどう阻害されているか、その背景は——といった問題についての相当に個人的な言説を展開した。なにしろこの標題である。いくつか問題の根幹にふれた疑問・批判をいただいたけれど、この核心に関してのぼくの考えは今でも変わっていない。

どんな言説・理論展開であったかは、当該小論をのぞいていただくしかないが、本稿が対象としている問題領域で「グリコ・森永」の際のメディアの動き・その意義にまったくふれないわけにはいかないので、小論の要旨、とりわけメディアの働きについての要点を以下に簡単にまとめてみる。

事件は'84-'85年に起こった。事件のくわしい経過の説明は省略する。グリコ幹部の誘拐、未遂に終わった現金の授受、グリコ・森永製品への毒の注入、という事実はあった(らしい)。というのは、たとえばあの誘拐は本当に誘拐といえるのだろうか)。したがって、犯人から各機関・各メディアへの脅迫状は、公表せざるをえなかった。テレビ・新聞での公表は、「犯人」の意図にそうことであり、「事件」の構成からすると、掲載・公表によって、メディアは「犯人」と共犯関係におちいる。しかも、公表によって事件の滑稽さと深刻さの両方が増幅される。なのだけれど公表は事件の解決、犯人の逮捕にいっこうに寄与しない——これが、メディアのはまり込んだ第一のジレンマであった。

これだけではない。「犯人」は反警察・反権力・反資本の態度を明確にしていた。警察を揶揄し、資本の犯罪を指摘する。事件の都市型犯罪の陰湿さ・卑劣さ・反人間性をうっかり倫理的に批判すると、ジャーナリズムのアイデンティティの根拠のひとつである反権力・反体制のイデオロギーに抵触しかねない。これもジレンマである。このジレンマに由来するメディアの態度の揺れは、オーディエ

「オイルショック」とメディアの相互関係は、社会的出来事とメディアとのまったく新しい関係が、ほぼ定着したことを示していた。その新しさをもたらしたものは、脱産業化・情報化・都市化等々が背景にあるにしても、つまるところはテレビというメディアの特性である。テレビというメディアの働きは、状況・社会・歴史の結果ではなく、独立変数として規定力をもっていたのである。「グーテンベルク」がある「力」を内在していたのと同様である。何回も指摘したように、テレビはメディアであるから、社会的なジャーナリズムの働きを担いうる。もちろん、そのメディア特性においてである。テレビをメディアとしたジャーナリズムが、新聞・ラジオの時代のそれと違っておかしくない。60年代末から70年代前半にかけての、ここで扱った「事件」で、ある意味でテレビはジャーナリズムとして機能していた。しかし、それは、古典的な伝統的な意味のジャーナリズムとは違っていた。その働きを表すパラダイムとして「ジャーナリズム」でいいのかどうか。

三 テレビジャーナリズム——その「終焉」の風景

60年代の騒然と比べると、70年代はオイルショック以後、比較的静かな時が流れていた。再三に及ぶ石油価格の上昇が、先進国全体に小さいけれどもっと強い衝撃を与え続けていたからかもしれない。80年代になると、おそらくは日本を先頭に、先進国は再三のショックを克服し、これまた日本を中心に空前の繁栄＝騒然状態になった。60年代の騒然の時も「個人」「個」が強調され、「個」の存在や意思が現象という形になって現われた。巨大な集合現象も「個」の孤立した、換言すれば自律的な意思と行動の集合態とみなされた。同様にとすべきなのだろうか、80年代もまた、「個の時代」「個性化・個人化の時代」といわれた。実際、80年代の「個の主役化」の規模は、文字通り「有史以来」であった。「個の主役化」「個人化」は、「消費文化の成熟」「差異化の狂奔」「ブランド志向」「ニューメディアのドタバタ劇」等々と同一パラダイム群に属していて、経済の異様な「好況」と手をたずさえて、「バブル」にまで昇りつめていった。「グリコ・森永事件」は、こうした時代状況を的確に象徴する現象のひとつだった。

この事件は、ジャーナリズムの現場に深刻な問題を投げかけた、とぼくは考える。しかしことわっておくべきなのだろうが、この事件など現代を象徴するものではない、ジャーナリズムにとっての深刻な問題はほかにある、という見方があった。こういう見方の存在

名称を与えたのも、この文脈においてである。「伝達とはこうした意味作用の一形態である」「メディアと人間との相互作用は、多様・多元的であって、コミュニケーション＝情報・知識の伝達はそのひとつにすぎない」といったコローラーがほぼ必然的に出てくる。マクルーハンの「メディアはメッセージ」「汎メディア論」等も当然このコローラーに含まれる。

ぼくは、ぼくだけじゃなかったと思うけど、あの動かぬ機体のシーンをあの緊張を伴いながら視続けていて、これは極限の、あるいは窮極のジャーナリズムなのではないか、と思ったものだ。なんとジャーナリスト、テクニクであることか。しかし、次の瞬間に、それが伝統的ジャーナリズムといかにかけ離れているか、にも気付かずにはいらなかった。これは、もはやジャーナリズムではない！そこには、記録性も、情報も、知識も、メッセージも、解説も、批評も、思考に対する誘導も、要するにジャーナリズムを構成する要件はどれひとつとしてないのだから。とはいえこのまったく新鮮な刺戟はジャーナリズムだからじゃないか、いやこれはもうジャーナリズムとはいえない。だったらこれは何か。メディアと人間のまったく新しい関係、というしかないのではあるまいか。ぼくの頭の中で出ては消えた思念の数々、相互に脈絡のない思考群、これ自体、研究の片隅に身を置くものとして、大いに刺戟だった。言説の風景には、多くの言説も心象風景も、当然のことながら、含まれる。

「ジャーナリズム」というパラダイムを、根底から書き換えねばならないのではないか、さらには「メディア」という概念も相当に拡張せざるをえないのではないか、だからまた「コミュニケーション」の定義も書き換えざるをえない——などと思案を重ねていたばかりの前に、また新しい事態が出現した。「オイル・ショック」。オイル・ショックは数々の「興味深い」現象を派生させた。焼跡闇市派が「オレたちの時代がきた」とうそぶいたのを含めて。しかし、これをメディアやジャーナリズムと直接関連させた議論はほとんどなく、せいぜい流言蜚語現象、大衆的ヒステリー現象、危機的状況への過剰反応といった文脈の議論が大半だった。

しかし、トイレットペーパーが店頭から姿を消したという「異常現象」は、テレビのワイドショーがトイレットペーパーを公団住宅の一室に山のように買い溜めた、正気の沙汰とは思えない「現象」を報じたところから始まった、後になってわかったことだが。当時、メーカーが生産をさぼり価格を操作しているという噂がもっぱらだったが、これも後に事実無根とわかった。トイレットペーパーで一杯になった部屋は、70年代前半のなんとなくモヤモヤした雰囲気とオイルの供給制限・価格上昇という非常事態の下でだと、たしかに

から機体の一部を映すしかなかった。カメラの位置は、純粹に物理的制約の下にあった。そのカメラの映す機体の一部を含むシーンは、通常だとしても「絵にならない」それであった。しかし、その「絵になってない」シーン（各局ともそうだった）から、ぼくらは離れることができなかった。犯人、会社、当局（外交関係を含んでいただろう）の間のやりとりは、当然のことながら、ほとんど情報として提供されなかった。したがって、その機体の内部で何が起きているのか、機体は次にどう動くのか、事態はどう推移するのか、北朝鮮側はどう反応しているのか、すべては臆測を一步も出ることがなかった。要するに、なんにもわからなかった。シーンは、こうした「意味」をいっさい語っていないかった。そのほとんど「意味零度」のシーンのな、が、ぼくらを魅きつけたのか。

「事件」が終わった後、あのシーンに何故魅きつけられたか。研究者・評論家・批判家の間で議論されたけれど、納得のゆく結論が出たわけではなかった。ブラウン管上の動きのないシーンは、一枚の写真や映画のストップモーションとは違う、その違いに魅きつけられたのだ、というのが同意された見方だった。これをぼくの考えで若干補完しておこう。「意味零度」は、「意味無限大」と紙一重である。何も語らないシーンは、あらゆる可能性・起こりうる事態を語っているからである。実際、ぼくらは、なによりもまず、「何時動き出すかわからない」から眼が離せなかった。のみならず、ほんの時々語られる数少ないナレーション、臆測でしかないナレーションが相乘されて、シーンは視ている側を緊張させ、ひたすら想像力を刺戟し続けた。ブラウン管の前において、これほど緊張し刺戟を受けたことは、少なくともぼくの場合、初めてであった。視ることの中身とは、刺戟と緊張の持続以外ではなく、「情報を得る」「知識を手に入れる」「事件・事態について知る」というようなものではなかった。つまり、これまでの「メディアに接する」「コミュニケーションを行う」ことは、ほとんど異質のこと、まったく別のことが起こっていたのだ。ブラウン管をみることは、「メディア接触」でも「コミュニケーション」でもなかった、いやこれもまた「新しい」それらなのか、どっちなのだろうか？——ぼくの頭の中を去来したことどもである。この考えをまとめて公表する機会はなかったけれど、ぼくとしては、従来からのメディア観・コミュニケーション観を変えざるをえない、と思った。あの当時の流行りでいうと「パラダイム転換」である。「人は、広義の情報環境と選択的な相互作用をしている。選択した情報と人との間にあるのは意味作用であり、これがコミュニケーションである」という、あの頃、何回か書いた定義は、その結果である。ついでにいうと、こうした選択的意味作用を、孤立して行っている人間のありように「カプセル人間」という

でもないが、テレビの描いてしまった「大事件」のせいで、あるいはテレビが描いたが故にそのセンセーショナルリズムが加速され増幅されたことはまずまちがいない。

一連の報道（テレビから週刊誌まで）に関して、事件とメディアの関係に、明らかに新しい側面が現われていた。新聞が報道の主役のシチュエーションでは、「事件」の意味・価値・重要度は、社会・歴史的文脈においてすでに決定しており、新聞はその「決定」を前提にしながら独自の判断をし、「事件」を報じた。ジャーナリズムとしてのラジオ・雑誌は、基本的にはこの新聞の「価値判断」を前提にしていた。ところが、「山荘事件」の場合（安田皆もそうか）、テレビが報じたから、「事件」になり、それに規定されて予算委審議が中止になった。つまり「事件」の意味は、テレビ報道が決めた。この働きをジャーナリズムといえるかどうかはともかく、「事件」の後に報道があるのではなく、報道とともに、「事件」が「発生」し、報道の仕方が「事件」の意味を決め、以後のメディアは、その意味に直接・間接拘束される。「流末」にある週刊誌の報道が、テレビ・新聞にフィードバックされることは、少なくとも「安田」と「浅間」の場合なかった。

こうして、「浅間山荘事件」は、事態と同時進行するテレビ映像の、しかも動きのない映像の「魔力」と、「事件」とメディアの「因果性」の不安定化と、このふたつを教えてください。このふたつが、広義のコミュニケーション理論にとってどの程度深刻な意味をもつものか、ぼくらは十分に認識していたとはいえない。

ぼくらのジャーナリズム観の論理的前後関係からすると、次の重要な事例は「淀号ハイジャック事件」であった。これも新左翼運動末期に現われた事件であって、ハイジャックの「思想」的意図も定かでなかったし、「事件」そのものもつ社会・歴史的意味となると、もう皆無といってよかった。何故、北朝鮮へ「亡命」しなければならぬのか、これが亡命なのか、「亡命」の先になにをみていたのか——誰も答えてくれない、誰にも答えられない疑問だらけであった。要するに、「事件」の客観的な意味は、まったく不明だった。しかし……。

しかし、あの映像は、「みせたな」。人を魅きつけてやまなかったのだ。板付空港に着陸後、北朝鮮行きを主張する犯人側と、人質の釈放と北朝鮮行きの可能性をさぐる当局との交渉の間、航空機は滑走路の一隅を動かなかった。各放送局のカメラは、極めて悪い視角

るといふ動きにはならなかった。テレビで見るかぎりには、事件は大変に衝撃的で、今、眼前に（眼の前のブラウン管上で）「天下の一大事」が進行しつつあり、現にその「事実」を自分の眼でみているという現実感が、人々をテレビに呪縛した。立ち去りがたかったのは、事件のせいであってテレビというメディアのせいとは、にわかには考え難かったのかもしれない。しかし、すでに指摘したように、衝撃的ではあったが事件そのものの社会的・歴史的意義は、さほど深刻ではなかった。ぼくらは、やはりあの時、テレビというメディアの特性の問題として、別の意味で深刻に考えるべきだったのかもしれない。このテレビが、ジャーナリズムという社会的機能の一端を担った時、どういうことになるか、を。

「浅間山荘事件」は、連合赤軍という新左翼セクトの起こした事件だった。「安田砦攻防戦」をピークにして、新左翼・全共闘運動は退潮著しかった。この種の運動体の常で、運動の退潮に比例して（反比例して？）、運動セクト内の抗争は激しくなり、離合集散が繰り返され、構成メンバーの数が激減し、「思想的」には尖鋭化し、現実の社会の動きから乖離してゆく。乖離はさらに抗争を激化させる。連合赤軍の場合は、その内部におけるリンチ・殺人にまでいたり、その残党が「浅間山荘」にたてこもったのである。いうまでもなく順序は逆になるわけだけれど、「山荘事件」後に、内部抗争・リンチ・殺人が明るみにでる。その実態は、凄惨・酸鼻を極めていた。「『思想』にとりつかれた時、人はそこまでやるか」という問題であって、この事実は「浅間山荘事件」を矮小化するほうにしか作用しない。したがって、テレビと新聞は、極めて形式的というか、ほとんどコメントなしの「事実」の伝達に終始した。ヘタに扱ふと「山荘」を大事件視したみずからと矛盾してしまう……？ ジャーナリズムは、眼前の進行中の「事件」に密着するという役割と、「事件」の歴史的経過を追い、その時間的・空間的立体像を描くという役割と、しばしば対立・矛盾するふたつの「心」をもたねばならないのだが、この時、テレビ・新聞は、前者に忠実で、後者を怠った。

リンチ・殺人を扱ったのは、主として週刊誌。客観的にみれば、なにかのためでない、自己目的化したリンチ・殺人事件であり、だから週刊誌の恰好のネタであり、大変に熱心に報じた、センセーショナルに書きたてた。「山荘事件」にのみ熱心だったテレビ・新聞を、ジャーナリズム的に補完したといえる。猜疑、嫉妬、憎悪、嗜虐、リンチという「人間的」ドラマの描写により熱心な週刊誌である。「事件」の深い背景にまでいたることはなく、ジャーナリズムの三つ目の魂、センセーショナルリズムにのみ忠実であった。いうま

催涙弾の大量の打ち込み、グループ側の反撃、警官隊側の死者、そして逮捕と事態は進行した。攻撃は早朝に始まり一八時すぎに終了、その間、NHKと民放全局が、ほぼ同じ映像を終日送り続けた。民放はCMの全部をカットし、NHKは予定していた予算委審議の中止（放映中止で予算委も中止、本末転倒？ 論理的・政治的順序の逆転？）した。十時間以上、通常とはまったく違う放送態勢であった——こんなこともありうるのだ！ 「安田砦」の時と違って、テレビカメラの位置はどうか警察当局によって決められていて、そしてカメラの移動は許されていなかった。各チャンネルで同一シーンが映され続けた所以である。しかも、攻撃は、「安田砦」の時と比べて「絵になる」動きに乏しく、動きのないシーンはみているものをいらだたせた。しかし、シーンは映され続け、人々はテレビから離れられなかった。もちろん、チャンネルの切り換えはあったと思うが、切り換え甲斐はなかった。こんな状態が終日続いた。問題はいくつがある。まず第一に「連合赤軍の残党立てこもり」という事件は、各局がCMをとばし、予定した編成を完全に崩し、終日放映を続けるだけの歴史・社会的価値（意義）をもっていったかどうか。予算委を中止するほどの事件だったのか。この間、報道すべき事象がほかに本当になかったのかどうか。警察側に指定されたカメラの位置でよかったのか、ジャーナリズムとしてその要請を受け入れてよかったのか。さらには、何故、全局だったのか、何故CMを全部とばしたのか等々。

この時も、視聴にかかわる数量的データの調査・蒐集はあったけれど、「事件の視聴」に対する本格的な調査・研究はなかった。『異常事態』の際にマスコミの態勢が平常時と比べて相当に偏る、その偏りからマスメディアの運動のメカニズムを深いところとらえうる」という仮説があったけれど、この際も仮説検証はなかった。のみならず、今右に書いたような、事実としてあったメディアの行動に対する批判もなかった。つまり、「安田砦」の時のあの批判が成立するのなら、「警察側に指定されたカメラ位置の甘受」は、より厳しく批判されるべきなのだが、批判はなかった。ここからはぼくの推測なのだが、「ブラウン管上の動きのないシーン、いらだちながらもどうしても視ることをやめられない視聴者」というシチュエーションの、「人間コミュニケーション」という文化形態にもつ意義について、識者を含めマスコミ・ジャーナリズムに関心をもつ人々が、この時からある予感をもつようになったのではなからうか。つまり、テレビの動かないシーンを長時間凝視し続ける——これは新しいタイプのコミュニケーション行為であるのかもしれない、と。しかし、この予感を手がかりに、この新しいコミュニケーションを理論的に考察する、あるいはジャーナリズムの新しい形態を模索す

判に正確にそっている。「抑圧された人々へのみ真実がみえる。その真実を語る資格はその人々へのみ許されている」という命題がまだ残っていた時代である。この正統派マスコミ批判を、多くの識者が容認して当然だった。識者のみならず、マスコミ関連の思想家・評論家、学者・研究者の圧倒的多数が、この見解を支持していた。ここまではよくあることだ。

ぼくが本当にいいたいのは、次の点である（前置ばかりで恐縮だ）。当然といえば当然なのだが、反権力・反体制の闘争をしていくはずの学生たちは、そのカメラの位置、つまりは映像についてまったく抗議したり、批判したりしていない。「権力の眼」とカメラの眼が一致していた、という事実すら語らない。まして真実を再現していない、などというはずもない！ カメラの眼はどっち側にあるかと真実を映すと思っていたのか、そもそもカメラの眼がどっち側にあるかなど問題ではなかったのか、その「現場」にテレビカメラが入っていればそれでよかったのか。つまり、彼らのメディア観、マスコミ観、ジャーナリズム観は、伝統的正統派の「観」・理念とは、無縁であったのだ。正統派のと彼らのと、両者のコントラストは実に鮮明で印象的だった。

社会（科）学的に言えば、この違いもしくは変化には、'60・'70年代が大きな思想的変換であったことがひとつ、テレビというメディアが従来のメディア観におさまりきれないものをもっていったことがふたつめ、少なくともこのふたつの要因が効いていると思う。テレビジャーナリズムが、実際にどう機能していたか（まったくの話なのだが、注目率・関心度の調査・研究はあるけれど、ジャーナリズムとしてどう機能したかの調査に、これといったものがない）はとりあえず傍に置くと、右に書いた「コントラスト」は、テレビ普及が終わったあとの、テレビがメディアとしての日常性を実現したあとの、テレビジャーナリズムのありようを、裏側からだけど、実に的確に映し出している。この「コントラスト」から、テレビジャーナリズムに関しての多くのことを読みとることができる。

'70年前後、'60年代の若者の叛乱も終焉を迎えつつあった。そのせいか、現象的には過激な事件が相次いでいた。同じ頃、大阪万博もあって空前の規模のイベントになっていたけれど、テレビ（マスコミ）を巻き込んで事件化していたのは、主としてこの叛乱がらみであった。ニュース性・事件性ありとされていたからか、メディアも相当丁寧に扱っていた、扱いすぎ……？（後になってみれば、ことからの歴史・社会的意義は意外に小さかった）。ジャーナリズム論の文脈から、まずとりあげねばならないのは、「浅間山荘事件」。連合赤軍グループの残党が人質をとって山荘にたてこもり、人質との交換条件も提示せず、警察隊と銃撃戦を演じた。山荘の部分的破壊、

もまず、彼らの「闘い」はテレビカメラの前でのみ成立する、「闘い」の傍にはテレビカメラがなければならぬ、テレビカメラを内部に含むことでパフォーマンスが成立する、というテレビイメージ。だから、テレビカメラを「闘い」の場に引きずり込むことにひどく執着し、そのために、ひとたびは拒否した他の、マスコミとの「記者会見」を彼らの意向で行っている。いずれにしても、テレビ放映のための櫓の構築は、彼らの主体的な意思の表現であり、大変に意図的だった。決して気まぐれなどではない。もちろん、意図的にテレビを許したこと自体が、彼らの思考の奇妙さなのだ、という批判はありうるが。

むしろぼくには、中学生の頃からテレビを見続けてきた彼らの、上の世代とはまったく違うテレビ観が印象的だった。まだ「マルクス」の影響が残っていた「闘争」だったけれど、「権力の手先、マスコミ」「ブル新」という概念枠から、少なくともテレビは大きくはみ出していた。'60年代末である。すでにテレビ（カラー化がほぼ普及）は、もっともメジャーなマスメディアで、すでに映画・ラジオ・新聞その他の先行メディアへの深刻な衝撃は出つくして、「勝負あった」というのが、たとえばぼくなどの実感だった。その最大のメディアがマスコミの定義の外側に位置づけられているとは。彼らの思考と行動には、「近代」の枠からはずれたところが多々あったけれど。このメディア観・テレビ観もそのひとつにはほかならない。それが、ぼくには「感動的」だったのだ。

ひどく長い前置きになってしまったが、ぼくが書きたかったことは、次のことである。「安田砦攻防戦」は、結局、二日間にわたり、この間、テレビは、事情の許すかぎり、「現場」を中継し、同時に撮影したフィルムを随時流していた（あの頃はまだ、ビデオによる再生はほとんどなかった！）。後の調査によると、テレビで「攻防戦」をみた人の割合は95%近かったと、記憶している。この数字はほとんどの人が一度や二度はみた、ことを意味している。大規模社会現象であった。その規模とあの「攻防戦」がもった歴史的・社会的意義とが正確につりあっていただけではないが。大規模化したのはテレビ放映のせいであった、といっても過言ではない。テレビカメラは、相当に刻明に「現場」を映していた。映像は、十分すぎるほどリアルであった。

しかし、正統派ジャーナリズム論者たちから直ちに、その映像への批判が出現した。曰く、「カメラは、機動隊（権力）側において彼らに向けられていた。カメラの『視線』は権力のそれであった。その『視線』で闘争の実体が、真実が、果してとらえられるのか。テレビは、ジャーナリズム成立の要件のひとつである『権力に対する批判の眼』を欠いていた」と。これは伝統的で正統なマスコミ批

肥大は、地球環境の破壊を顕在化しつつあり、大量生産・大量消費の文明が懐疑され、そこに一九世紀以来の「近代」の過熟と衰弱の予兆をみるムキもあった。ともあれ、若者叛乱の渦中にいたばくにしても、たとえば「戦後史」の大きな屈曲点にいるな、という実感を禁じえなかった。この大きな転形期の中で、テレビは、人々に強く存在感を示していた。したがってある人々にとっては、テレビは大変に目障りだったのではあるまいか。ともあれ、この激動と転形の時代に、テレビは主役のひとりとして登場しようとしていた。

ひとつ実例をあげる。これは、あまりに典型的なものでもう何回も書いているからいささか気がひけるのだけれど、やはり典型は典型である。'69年、この国の若者・学生の叛乱はピークを迎えようとしていた。その象徴的事件の「東大安田啓攻防戦」。新左翼・全共闘系学生対機動隊の間の「大攻防戦」は、何日か前に「何日何時開戦」と「予告」されていて、その数日前からバリ封鎖された東大構内への「権力の手先、マスコミ」の入構はできなかった。しかし「攻防戦」の前日、テレビ局が放映用の櫓をつくるのは許されていた。むしろ、マスコミ入構を拒否していた全共闘系学生から放映を要請されたケハイである。「テレビはマスコミではない」——なんてことはありえない。テレビは、「攻防戦」というパフォーマンスの重要な構成要因のひとつであって、これを欠いて彼らのパフォーマンスはありえなかったのだ。すでにマスコミの最大のメディアであるにもかかわらず、テレビは、「マスコミは敵」「権力の手先」「ブル新」といった伝統的な「規定」からはどうやらはずされていたらしいのだ。彼らのテレビ観・テレビイメージはそうであった。伝統的なジャーナリズム観の持主からすれば、彼らのマスコミ観・テレビ観は支離滅裂である。研究職にある知人のひとりには、彼らは過激な行動をするのみで、統合され一貫した体系的思想の持主などではなく、要するに無重力空間に漂っているだけ、その非常に感覚的で気まぐれな好悪感から「テレビ大好き」といつてるにすぎない、とまで断言した。ある意味で核心を衝いていると思ったけれど、ぼくの見解は若干ニュアンスを異にしている。

ぼくには、学生たちがまったく気まぐれに「闘争」しているとは思えなかった。彼らには彼らなりの闘争観・戦略があるはずであり、さらに上の世代には認識しにくいのだが、彼らなりのテレビ観があって、彼らはみずからのパフォーマンス（闘争をパフォーマンスという文脈でとらえていることに対する批判は当然ありうる）の「成就」にとって、テレビというメディアは不可欠、と考えていた。付度するに、テレビ放映によって、自分たちの「闘い」を国民一般に知ってもらいたいという気持がいくばくかはあったけれど、何より

る。このぼくら大衆の実感に否定的だからこそ多くの識者がブーアステインに同調したにちがいない。肉眼でみた光景、カメラのファインダーを通してみた光景、これを写して焼き付けた写真の光景、この三つが微妙に違うことを、人々は知っている。人々はまた、どの光景がより真実か、という愚問を発しない。真実が多層的・多層的でありうることを無意識のうちに知っているからである。もちろん肉眼の光景が幻影である可能性も。かくしてテレビの映像においておや、である。こういうふう展開すると、ブーアステインは、半分正しい。しかし、彼は、幻影が真実を語り描きうることにふれなかった。まさか知らなかったわけでは……。そしてぼくたちは、すでに'60年代に、このふれなかったテレビのメディア特性を、しばしば目撃していたのである。

'70年前後、カラー化し、さらに同時性を強化し、さまざまな映像技術を開発しつつあったテレビは、相変わらず幻影を生産し続けるという事情には変わりはなかったけれど、「幻影を生産し伝達し続けている」というだけではすまないさまざまなメディア特性を獲得していった。断章にしてはもう長すぎるので、'70年以後については、項をあらためることにするけれど、テレビのメディア性を語る言説が、そのジャーナリズム性をめぐる言説が、ブーアステインの描写が、テレビというメディアの特定の一面を的確に衝いていたのはたしかであった。もちろん、テレビという「光景」の全景を描ききっていたわけではないが。しかし、あの時、あの事象のどこを、なにをテレビは描いていたかより、その時のテレビはどうだったかという言説のほうが、あの時・あの事象・あのテレビをよりリアルに思い出させてくれるのではあるまいか。

二 テレビジャーナリズム——その逆説の風景

'60年代後半の若者の叛乱、マイノリティグループ・サブカルチャーの自己主張であったところの「闘争」、その劇的ともいえる終焉は、冷戦両陣営のリーダー格の米・ソの強さ・権威のかけりを予感させていた。米国のベトナム敗退と中ソの対立抗争は、二〇世紀後半、人類社会の「福祉」実現のふたつの方途が幻想にすぎないことを教えてくれた。他方、'60年代まで米国の世界戦略に組み込まれ、結果としてその経済・軍事体制に奉仕していた、第二次大戦の敗戦国「日・独・伊」が、経済的にも、政治的にも、米ソ・戦勝国と対等、もしくは彼らを凌駕し始めていた。端的に言って、冷戦構造が大きく変わりつつあった。加えて、50・60年代の先進国の文明の

ム以前の話である。テレビは、社会的メディアとして有害無益といわれているに等しい、つまりはジャーナリズム機能など最初からもっていない——リップマン・ブーアステインの論理的にしたがうところならざるをえない。ここから、ふたつの立場が可能になる。ひとつはテレビは所詮非ジャーナリズム的メディアなのだ。もうひとつは、「ジャーナリズムに親近性の乏しいテレビというメディアにおいて、いかにすればジャーナリズムは可能か」。テレビが社会的に有力なメディアであることは認めざるをえないとしたこの国のテレビ批判者の多くは、この第二の立場をとろうとした（テレビで放送中のニュースキャスターがオーディエンスに向って、「今すぐテレビを消しなさい」という。こういう逆説的でドラマティックな「シーン」はついにこの国にはなかった）。しかし、古典的なジャーナリズムはテレビにおいてはどうやら不可能。そこでテレビメディアの特性を生かしたジャーナリズム、またの名「ニュージャーナリズム」の方法・様式・スタイルが模索された。現在も模索中で、その方法が確立したとはいえない。テレビにおけるジャーナリズムとは一体、何？

理念化したジャーナリズムの立場からテレビを批判する立場にとって、ブーアステインの認識と主張はどういう意味をもつのだろうか。現代のメディア状況だと、ブーアステインの論理に従えば、幻影の再生産が無限に繰り返えされ、幻影は次の幻影を生み、その全体は巨大化するだけ。そして再生産の都度、幻影は幻影度を増す。ジャーナリズムどころのさわぎではないかもしれない。これはもう見事に徹底した、根元的な、そして過激なテレビ批判である。メディアとしても否定されている。とすればテレビジャーナリズム論者にとっては、やはり痛し痒しだったのではなからうか。

ブーアステインの所説に対して、写真でも映画でもテレビでもいい、マンガだっていい、それが幻影であるが故に「真実」を描きうるのだ、という反論がどうして成されなかったのか、ぼくには不思議である（この文脈では幻影は否定的な意味をもたない。むしろ大變に肯定的な含意があるとみている）。モノクロであれ、カラーであれ、キメが極度に粗い月面からの映像であれ、眼前に現にある光景を映したものであれ、すべてが幻影である。現実そのものなどではないのだから当り前だ。しかし、その幻影が真実を、肉眼でみえない真実を、再現し伝え、ぼくらは幻影によってそういう真実をリアルに認識した——これが先に書いた「皇太子」から「オイルショック」までの、ぼくらの実感ではなかったか。ブーアステインの意見は、ぼくらのこういう実感と矛盾している、いや実感を否定してい

ど作為的だと思う。だとしたら、どうして「やらせ」だけを問題にするのか。テレビ番組批判が、極めて意図的に特定のターゲットに向けられている、といわざるをえない所以である。

ぼくは、そこにいささかの悪意を感じてしまう。いや、体制／反体制、権力／反権力、資本主義／社会主義といった一九世紀以来の善悪の二項対立を機械的に持ち込んでいるだけ、百歩譲っていっても、体制・権力批判が知的であることのアイデンティティという思い込みで批判しているだけ。テレビはすべからずジャーナリズムであらねばならないという主張が、こうしたいうならばイデオロギー的立場（恣意的な取捨選択には眼をつぶるけれど、「やらせ」を許さない）からのみなされていること、これはテレビジャーナリズムにとっても不幸なことだ。

テレビに対して決して好意でない評価が繰り返されていた'60年代・'70年代、皇太子の結婚から、ケネディ暗殺、東京オリンピック、アポロ計画、ベトナム戦争、大阪万博、国をあげての高度成長・生活構造の変化、そして70年前後の若者の叛乱、オイルショックまで、ぼくらは、「世紀の大事件」をブラウン管で「まのあたり」にすることになる。スポーツ競技の実況を含めて、これらの「絵」のリアリティは圧倒的だった。「テレビに映っている以上、これは事実なのだ」という人々の実感の前に、古典的ジャーナリズム論が指摘し主張する現実再現の恣意と偏向、擬似性、ステロタイプ、イデオロギー性等々は、もうほとんど説得をもたなかったのではなからうか。このテレビが急テンポで普及しているその真只中に現われたのが、ブーアステイン『幻影の時代』だった。アメリカでどう評価されたのか。少なくともぼくらの国では、なにしろアメリカ産であって多くのテレビ批判（者）にとって最大・最強の援軍となった。現在でも、テレビ批判の言説（論文、著作）に必ずといっていいが引用され言及されている。リップマンの『世論』とともに、マスコミ（テレビ）批判の基準として生き続けている。一方にテレビ映像の偏向（だから幻影）・画一性、真実からの無限の乖離を置き、他方にこれを無批判・情動的に受容する非理性的な「一般大衆」を配する。これはリップマン以来の図式であって、ブーアステインは、リップマンと同一の「社会哲学」の立場にある——アメリカ的良識？

テレビが提供しているのは、いや現代においてメディアが提示しているのは、基本的に幻影であるとするれば（念のためことわっておくと、幻影と真実とは対極的であるから、このパラダイム構成ではまったく否定な意味しかもっていない）、論理的にはジャーナリズム

いたらなかったが、テレビの出現はあの日常的ジャーナリズムを社会的規模で再現・再構成するのだが、かつてのあの「場」を浸蝕し消滅させながらなのであった。もちろん、これはぼくの見解であって、この考え方はいわゆる古典的ジャーナリズム論とは、さまざまな点で抵触しているはず。

テレビジャーナリズムについては、放送・受容が本格化し始めた'60年代から、否定的評価が頻出する。「一億総白痴論」などは、ともに受け取れば典型的な批判、あるいはもっとも「鋭い」批判といえないこともない。そしてテレビジャーナリズム批判は、ここをひとつの出発点として始まった。だからテレビジャーナリズムの知的水準は低い……。

そのせいもあって、憂慮すべき社会現象の直接・間接の原因がテレビにある、テレビはそのリアリティと大量性で深甚な影響を「一般大衆」とりわけ若者・子どもに与える、テレビ番組の制作・編成には常に「悪貨が良貨を駆逐する」という原理が働いている、接触が物理的・身体的・心理的に低い「コスト」ですむテレビはどうしても長時間視聴になりやすい、番組の背後にいる国家権力・資本主義的企業・営利を目的とした放送事業者等は決して善意の存在ではない——等々の批判の典型的な言述・スタイルは、この五十年、ほとんど変わっていない。こうした個々の言述について、それぞれがどの番組を想定して批判を語っていたか。だいたい見当がついてしまう。批判は、テレビ番組の全編成（チャンネルを超えて。視聴者は同一チャンネルで見続けているわけではないから）を視野に入れているわけでもなかったし、対象番組が誰に・どの程度・どうみられていたかを考慮していたわけでもなく、狙った特定の番組を意識的に孤立させておいて、つまり前後の脈絡をはずしてその内容をのみ問題にしている。いうまでもないが、その特定の番組は限定されたカテゴリーに属している。いや、正確にいうと、限られた番組内イッシュューの取扱いが批判の対象であった。曰く、「やらせ」「残酷な場面」「センセーショナルな扱い」「偏った意見」「人権・プライバシーの侵害」等々。制作も編成も、無数の物理的・社会的・文化的制約の下で行われているわけだから、弱点など簡単にみつかる。だからこのテの番組批判など誰にでもできる。個人的なことだが、ぼくは時々テレビの取材を受ける。当該問題について、一時間か一時間半は必ずしゃべる。しかし、ぼくが画面に登場する時間は、絶対に三分を超えない。90〜60分を3分に——モノスゴイと形容するしかない「知的操作」（編成？）が行われている。これと「やらせ」と、人為性というか恣意性というか、そういう点でどう違うのだろう。ぼくは60分を3分以内に切り捨てる「知的操作」のほうがよほ

識や意見を交換していた」といいなおせば、このテのおしゃべりは機能的にはジャーナリズム的であった、いやジャーナリズムそのものであった。井戸端やいろり端や銭湯という「場」にジャーナリズムがあった！——のだ。テレビジャーナリズムとは、だからその延長線上にある、とぼくはいいたい。が、しかし、これには、もうひとつの面があって、テレビの普及とともに、こうした「前近代的」コミュニケーションが、あるいはコミュニケーション成立の場が、急激に減少し、そして消滅し始めた。テレビは、「前近代型コミュニケーション」の止揚・克服の促進要因であった可能性が大きい……？ たしかなことは、テレビの普及の過程とぼくらの社会の近代化の進行とが、見事に併行していること。そしてなによりもまず問題なのは、あの「前近代的」ジャーナリズムをジャーナリズムのメディアであるテレビが、どう継承しどう近代化したか、ということになるはず。この点に関して、ぼくは正直、両義的な認識以上のものをもてない。

テレビが、日常生活のさまざまな局面で、前近代的なものを終焉させ、近代に属するとするしかないものを創ったこと、しかもこれらを全社会的規模で同時進行させたこと（古い習俗の消滅、共通語の全国化）は、これはもう事実である。そのテレビが、報道・教養番組などで「古きよきものの保存」とか、「方言の保存」とか、「町並保存」とか、「伝統芸能のみなおし」とか、「地域社会の活性化」とかを論じ主張しているのを見てみると、ぼくは大変複雑な気持ちになる。そのシラジラしさに、時に偽善や欺瞞を感じることすらある。加えて、いわゆるテレビ批評家や識者の多くが、この種の番組を高く評価する。「伝統」や「文化」を真摯に取り上げる番組こそ、「伝統」破壊の元凶であるという逆説・背理を、彼らはどうみているのか。「伝統」をとりあげないより、とりあげるほうがまだまし、ぐらいにしか思っていないのか。

話をもどそう。右に書いたことを要約すると、人間のごく日常的なコミュニケーション（井戸端や床屋でのおしゃべり）行動に、必ずやいくばくかのジャーナリズムが含まれている（いた？）。テレビジャーナリズムは、この日常性の延長上にすんなり位置づけられる。その点で新聞というメディアが体现したハレ的なちょっとよそ行きのコミュニケーションスタイルとは、いくらか異質などころがある。これをいいなおすと、社会的に機能しているジャーナリズムの様態としてみると、「お上批判」という井戸端の日常的なジャーナリズムは、新聞の出現でハレ的な形に部分的に転化する。ただ新聞はあの前近代的なコミュニケーションの「場」を直接破壊するに

続けている。以前の問題の処理が次の問題の発生を抑制する、あるいは処理を容易するというふうには、まずはならない。これは、ジャーナリズムというフィクションを構成する諸価値がいかに人為的・作画的・恣意的であるかを物語っていると思う。したがって、テレビジャーナリズムについていえば、テレビというメディアがジャーナリズムとして機能しうる、機能してほしい、機能すべきである、という思考や願望を理解できないわけではない。しかし、このことは、テレビが常にジャーナリズムである、テレビが社会的に機能すれば、それはジャーナリズムにほかならない、ということではない。「ことば」も「グーテンベルク」もジャーナリズムという働きに寄与している、ジャーナリズムは「ことば」や「グーテンベルク」なしにはありえないのだが、しかしジャーナリズムが「ことば」や「グーテンベルク」を作ったわけではない、ということと事情はまったく同じである。

テレビは、いわゆる先進国・文明社会・民主社会で発明され、そしてそこで細部のイノベーションが絶えず行われ、予想を大幅に上まわる速さで普及し、ごく日常的なコミュニケーションのスタイルとして定着したのはたしかで、近代社会での人々の日常的なコミュニケーションに必ず含まれているジャーナリズム的機能の一端を担ったのも事実である。しかし、テレビというメディアの享受者^{オーディエンス}たちは、テレビが日常的コミュニケーション全体にとって大変に役に立ち、親しみやすく接触しやすく、便利で安価であるから、テレビの導入・利用・享受に好意的かつ積極的であったので、すぐれたジャーナリズム機能をもっていたからでは必ずしもない。「オモシロクなければテレビではない」というキャッチフレーズは、右に書いたことを実にわかりやすく表現しているのみならず、テレビというメディアの特性の核心にふれている。

ぼくらの社会にまだ前近代的なものが数多残っていた頃、といってもそんな昔ではない、要するに50年代、テレビ普及以前の頃のこと、「テレビの歴史」には前史が書かれねばならないと思うが、その前史に是非欠かせないことなのだが、その頃、相も変わらず井戸端やいろり端、床屋や銭湯、場末の酒場の片隅等々で日常的に繰り返されていた、やুক্তいもない・らちもないおしゃべり、けれどやってる当人たちには愉しいおしゃべり等々のコミュニケーションのスタイル。忘れてならないことは、このスタイルをちょっと延長したところにあるのがテレビコミュニケーションなのだということ。この文脈でテレビとジャーナリズムの関係を考えるとわかりやすい。つまりかって「床屋政談」というのがあって、床屋に集まっ隣近所の面々が、お上の政治を批判しあった。「そこで政治的な情報や知

社会的動物であるヒトは、地上に出現以来現在まで、その社会の姿・形の変態をいくつか経験してきた。近代という時代を始めた時、人と人とのかわりの全体的仕組み、人間の集合体の管理方法、集団の意思決定のスタイル、集団間の関係とそこに発生する問題処理の作法等に関して、固有の理念と方法をもち、それを「民主主義」「民主的」と名付けた。さまざまな社会の姿と形、そのありようは、いずれも人間が作ったものであるから、人工的で人為的で、時には恣意的ですらあった。比較してみればわかるが、中でも「近代社会」は大変に作為的で人工的である。換言すれば、フィクシャス。「近代」や「民主主義」という理念を構成するいくつかの価値の意味と内容、それらの間の論理的な関係に立ち入ってみれば明らかである。自由といい、平等といい、個人（個性、個人主義）といい、競争といい、自立（自律）といい、責任といい、自己規律（抑制）という。近代化とは、これら価値の実現の度合にほかならないのだが、いずれも人間の願望、悲願を概念化したもの、あるいはその表象である。つまり、いずれも理念・理想の次元に属している、現実の次元には属していない。だから端的に言って、これら諸価値の一〇〇%実現、とりわけ諸価値の同時・同程度の実現などは、ありえない。つまりは、右に書いた思想の全体がフィクションなのである。

「民主政治」とは、その近代の政治（統治）の理念的形態であり、壮大というか、美しいというか、ありえないというか、そういうもの。民主政治の理念と、只今現在先進国にある民主政治のいくつかの現実とを比較してみるといい。その落差は大きく、しかも現実が着実に理念に近づきつつあるなんてことはまずいえない。それに、これは多くの臆断なのだが、現在、民主政治を実行しているとされる先進諸国の政治的リーダーたちは、たしかに口では「民主主義」をいい、これに抵触し違反している社会・国家・民族を「非民主的」と非難・攻撃している。しかし彼らが民主主義の理念を本当に信じているのかどうか、ぼくは疑う。疑わざるをえない事実などいくつもあるのだから。

ジャーナリズムは、このフィクションを背景もしくは基盤にして発生し発達してきたわけだから、当然のことながら人工的で人為的で作為的なものである。自然に発生し、自然に進化したものではない。ジャーナリズムが出現し社会に働きかけるようになってもう二百年以上。ところが二百年もやっているのに、たとえば「言論の自由」、「プライバシーの尊重」、「自由と、個人や集団の福祉の関係」、「取材・表現の自由の限界」等々についての理論的な説明は安定していない。かくしてこの二百年間、同等・同質の「問題」が発生し

あり、社会的装置であるテレビもやはり例外ではない。テレビという社会的な営みにかかわって発生するいわゆる「不祥事」は、五十年間、断続的に起こっていて、増減なし。「深く反省し、今後の指針とする」というその都度の声明は、一体なんなんだろう、と思いたくなる。こうした「事件」もさることながら、昨今高視聴率の身上相談というタテマエで、プライバシーを商品化し、のぞき見欲求を十分に満たしてくれる「ワイドショー」をみていると、日頃の「テレビは社会の公器。公共性をいかに追求するか」というタテマエと、この番組の実態とは、どこでどうつながっているのか。少なくとも論理的に考えたのではわからない。番組に登場するシロウト出演者がどこまでホンキなのか、もまったくわからない。そう、もうこうなると真偽などどうでもいいのであって、「話」がオモシロイかオモシロクナイかだけなのだ。その証拠に、身上相談とはいうものの、いわゆる専門家は出演しておらず、答えたりアドバイスしているのは、全員がタレントである。「やらせ」がそんなに問題であるのなら、どうしてこの種の番組が問題にならないのか。実際、誰も問題にしていない。思うに、ぼくが今ここであれやこれやいっているこの議論は、テレビをめぐる今時の議論の常識に反しているのだ。

ほかでも議論したことがあるが、たとえば「ジャーナリズム」。どう定義するかにもよるだろうが、「近代民主政治」という政治システムにとっては、ジャーナリズムという機能は不可欠というか、あったほうが健康である。この文脈上では、テレビもメディアである以上、ジャーナリズム機能の少なくとも一端を担わねばならない。かくして「テレビ・ジャーナリズム」をキーワードとした一群の理論的言説がある。この言説の中ではテレビメディアの機能にジャーナリズムがア・プリオリに含まれている、ということになっている。その意味は、テレビで報道番組その他を放映すれば自動的にジャーナリズムとして機能する、テレビコミュニケーションには本来的にジャーナリズム機能が含まれている、ジャーナリズムを欠いてテレビはありえない、ということである。たしかに、一九世紀に本格化するいわゆる欧米先進国の近代化があって、これを背景にしてジャーナリズムが成立し社会的機能を負い、このジャーナリズムの発展の二〇世紀後半段階にテレビが出現した。つまりは、テレビは「近代」を「宿命」のように背負っている。だからその役割がジャーナリズムであって当然である。テレビも基本的にジャーナリズムでなければならぬ、と。しかし、ジャーナリズムの近代的展開の中で、必然的にテレビを産んだわけではないこともまた事実である。

メディアである。言語をめぐる、思考と議論を夥しく重ねてきたように、テレビについてすでにこれまでも語り考えてきた。これからもやめないだろう。

「日本語の歴史」とか、「ことばの変遷」とか、そういう主旨の本がたくさん書かれている。専門が専門だから、この本はいずれも興味深い。読みながらいつも思うのは、書かれていることの、どこが「客観的・科学的真実」で、どこが「神話的事実」（これはある意味で譬喩的）か。早い話、単語ひとつひとつに歴史がある。人間の使うことばだから当然なのだが、時（歴史？）とともに、意味内容が、間口と奥行の拡大・縮少、横滑りの変異、スパイラルをなした変容、反転的変化等々、多様多彩な変貌を繰り返していて、まこと興奮をさそってやまない。がしかし、どこまで本当か。もちろん、「本当でない」ことを非難しようというわけではない。ことばについての、どういうスタイルの言説がより多くの「真実」を語るか、という問題があるからだ。ことばについて長々と書いてしまったが、要するに、メディアとしてのテレビも事情は一緒だろうということだ。

テレビという表現体において、言語の単語もしくは基本的な要素にあたるのは、単位映像というかショットになるだろう。モノクロテレビの時代の、あるいは'60年代のドラマの基本映像の構成・様態と、現在の映像・ショット・シーンはどう違うか。包括的かつ刻明に議論したら多様にして膨大なものになってしまうと思うが、ひとつだけ言うと、'60年代のショットはドラマの「現在」をまるごと、鳥瞰的・俯瞰的に表現しようとしていた。だから、ひとつのショットに映っている登場人物の数は多く、ショットの持続時間も長かった。そして今だと、ドラマの「現在」を構成している諸要素から意識的に選びとられた部分によって「現在」を表象しようとする。だから映される人物の数は'60年代に比較すれば少なく、ショットの持続時間は短い。これはあくまでもひとつの事例にすぎないが、とにかく「テレビ言語」はこういうふうにも変った。したがって、その変貌の全体像となると——やはり本格的な「テレビ表現性」についての議論が必要。いうまでもないが、こういう「言語の歴史」が、すべて表現者（送り手を含む）の意図的なあるいは創造的な意思の結果である、とはいえない。科学的かつ論理整合的には説明できない夥しい事情・経緯が折り重なった結果としかいいようがない。

ことばの上の行き違いが、「決闘」になり、「生命」のやりとりに行きつめた例は、古今東西山ほどある。コミュニケーションという文化は、元来がそういうものなのであろう。コミュニケーションの一発展形態であり、より文明化されたスタイルであり、メディアで

しかし他方、「五十年」とはテレビの出現と定着の五十年であり、ひとつのメディアがたかだか五十年で本当に社会化するのは、どうか、という疑問がある。たとえば「写真の歴史」をイメージしてみれば、どんな疑問かわかってもらえると思う。それにまだぼくらは、そのひとつつながりの五十年の中にいる。五十年を歴史という枠組に入れていいものなのかどうか等々、あれこれ考えると、ぼくらと、いや少なくともぼくと「五十年」の位置関係は、大変に曖昧になってくる。加えて、『グーテンベルクの銀河系』を模して、「電子メディアの銀河系」（「銀河系」といえるかどうかは後述の予定）を使ったことがある。「グーテンベルク革命」に対して「電子メディア革命」とすれば、只今現在は革命中、革命中に歴史を云々していいのか。

というようなこともあって、テレビ五十年の歴史性については、いろいろ問題あり、と思っているし、気になることが多々ある。だから、ぼくには、テレビ五十年史は書けない。が、歴史性のことは傍に置いて（ということとは、位置関係は曖昧なままにしておいて）というと、意外なところに「歴史」がみえる、ということがあるような気がする。ぼくにとって相当に興味深いものに、テレビに関わる言説の推移・変遷がある。言説の流れの時間（歴史）的経緯に、あるいはそのイデオロギー性・幻想性^{グーテンベルク}の再生産の過程に、大変に興味関心をもっている。数多の言説を綴り合せてテクスチュア（テキスト）を織り上げると、大変に説得力のある「物語」に、要するに「歴史」になるんじゃないか。それは、実態もしくは実体をもって描かれた歴史よりよほど、ぼくらがこの五十年間に体験した「テレビ」に近いのではあるまいか——などと考えている。ちょうど、神話を構成する個別の「小物語」が実在した歴史的事実を正確に語っているように、そして科学的に記述された歴史よりも神話のほうがよほど説得力があるように。テレビの「神話」を物語化することは、いずれば必要だろう。その時、すでにして夥しくある言説はその有力な素材となる（ぼくに残り時間と余裕があれば……）。

右に書いたことは、決して奇をてらったわけでも、正統へのことさらな反抗でもない。人類は、言語を創造し、これで語り、伝え、知覚し、認識し、記録し、思考してきた。と同時に、この言語とはいかなるものか、どんな歴史（言語の歴史）を経てきたのかについて、「事実」を記録し、言語についての思考を重ね、これらすべてを言語で残している。言語は、最広義のコミュニケーションの手段であり、それ故に人の知的好奇心と深い思索の対象であり、こうした人の知的営みの記録の手段であった。いや、今でも、そうである。つまり、言語はその意味でメディアである。テレビと言語の違いをいくつか数えあげることができるだろうが、しかし、テレビも

か。そして今後は？ 「今後」についてはまた別のエッセイで書く予定。三つの文章は、だいたいこの'60年代、'70年代、'80・'90年代に対応している。ひとつだけ、結論的感想をいうと、テレビはこの三つの時期それぞれに違った位置と機能をもっていた。だから当然、それぞれの時期のテレビジャーナリズムも同じではない。それはまさに、「歴史がある」ということになるだろう。これが、方法・スタイルが違うひとつの理由である。

ぼくは、テレビは、メディアとして社会的に定着し、安定した性格・機能をもったメディアにまだ十分になってないともみている。B S化、C S化、デジタル化、ハイビジョン化、インターネット等々、今あるテレビメディアにインパクトを与える条件が次々に出現している。テレビはなくならないが、深刻に影響を受けるはずである。したがって、テレビメディア論のほうも未完でなければならぬ。いろいろな議論があつて当然である。ぼく自身も、いろいろな考え方・議論にはお目にかかりたいと思つている。そして出来たら議論に参加したい（その歳で？ といわれそうだけれど）。この文章が、議論に少しでも役に立ってくれば……。

尚、先にも書いたような事情があつて、この文章の読者として想定しているのは、まず、ぼくの講義に接している学生たちである。スタイルに共通点があるとすれば、それは学生たちにどう語りかければ伝わるか、というぼくの気持による。シリーズ・著作で、スタイルとして意識しているのは、この読者に対する伝達性ということであつて、本稿もまた、そうである。もちろん、伝達性があるかどうかと、現実に伝わるかどうかとは、必ずしも一緒ではない。「伝えてもらいたい」意思がなければ話は別になる。この点に関していえば、ぼくは決して楽観的にはなれない。

一 テレビジャーナリズム——その言説の風景

テレビ五十年は、そもそも今のぼくらにとって、限定してテレビメディアを専門領域・対象の中心に置いてきたぼくにとって、歴史的なのだろうか——などということが、妙に気になる。五十年視続けたテレビそのもの、テレビ受像機の前に居続けた人々のたたずまい、テレビをメディアにして起こった事件・現象の数々、そのテレビを論じた言説のあれやこれや等、これらの変遷をみてみると（ぼくらの世代は、ある意味で観察者としては恰好の位置関係にあつた！）、「五十年」は今やひとつの歴史である、とせざるをえないかな？

前回掲載分では、「経済世界」の中のメディア空間の位置づけを試みた。その続きとして「政治の世界とメディア空間」という文章を書いたが、これは『メディア空間』に直接収めることにした。で今回は当初、「文化とメディア空間」論を試みるつもりであったが、ひとつの文章という形式におさめられるようには、思考の内容がまとまらなかつた。まったくもって慚愧にたえない話である。

「テレビジャーナリズムは可能か」といったテーマについては、以前から考える機会、おしゃべりする機会も多く、考えはまとまっているし、モトにできる論文やエッセイがいくつもあるので、今回は、これを当てることにした。いうまでもないが、ぼくのイメージの中の「ザ・ミーディアム」には、メディア各論という形で含まれている。この文章が、目の目をみることなどないのであると思っていた。内容を講義することはあっても。いささか渡りに舟というケハイではあるがこの機会に発表させていただくことにした。

「テレビにジャーナリズムは可能か」「テレビジャーナリズムがありうる（あるべきだ）」として、どんな特徴をもつか」「現在のテレビ報道のスタイルとジャーナリズム機能との関係は」「そもそもテレビジャーナリズムとは？」といった主題については、ぼくのみるところ、まだ大方を納得させる答は出ていない。もちろん、今すぐ答を出さねばならないとも思わないし、容易に答が書けるものもあるまい。しかし、テレビというメディアのもつ潜在的可能性を拡大・実現するメディアの現場が正常に作動し続けるために、答の出ない議論を繰り返すことに、ぼくは意義を認める。これからも議論を続けねばならない。その議論のために、この文章はいくらかは役に立つだろう、というほどの自負はある。ぼくなりには、テレビジャーナリズム（言説）史の整理と、議論の際の緒口の提示を試みるからである。

テレビ50年である。以下では、この50年を三つの時期に分け、それぞれの時期について書き（描き）やすい方法・スタイルで「その時のテレビ」を語ってみたいと思っている。つまり、三つの時期で厳密にいうと、方法・スタイルが違うので、全体としては一貫性のある文章になっていない。三つの独立したエッセイというのが正確なところ。もちろん、それぞれのスタイルは、その時期のテレビとその周辺を再現するのに一番合っている、と思っではいる。各時期のテレビジャーナリズムの実状に、ある程度、せまっている、という自信はある。

テレビは、60年代は文字通り「ニューメディア」だった。70年代に本格的な成長期に入り、80年代以降は成熟期ということになるう

ザ・ミーディアム

——メディア論の試み(VI)——番外の章

テレビジャーナリズムをめぐる

この種の論文で、楽屋裏の話を書くのは、まったくの逸脱だということはよくわかっているけれど、本稿を公表するに当たっては、どうしても書かねばならない、という気持なのである。どうしてか。

もともと、この『ザ・ミーディアム』シリーズは、'80年代後半、担当の講義の内容を根柢から変えねばならないと思い、暇をみて誌していたメモ類、半分ぐらいは形を成した論文、エッセイ風の感想文等々が、モトになっている。これらを、とりあえず論文の体裁にまとめ書したのがこのシリーズの各編である。ひとつの体系的な理論的著作に、などとは考えていないので、各編の構成・文体に統一性・一貫性はない。小著『メディア人間』と『メディア空間』には、シリーズの何編かを収めてはいる。著作にする際には、だから、若干の手直しはしている。

メモ、「半論文」、感想、エッセイを書く時、イメージとしては、問題はどの範囲に拡大するか、個々の問題、主題をどう思考・認識し、それぞれをどう関係づけるか等々、頭にはあった。たとえば、一方にかなり原理的なメディアに関する理論的考察があり、他方の極に各メディアについての特性の抽出とその描写を個別に試みる、というふうな。だから、テレビメディアについて感じ考えた「文章」も相当量ある。

中野 収